

機械になる社会

—カール・ポランニー、社会学理論としての可能性—

犬 飼 裕 一

1. 機械と人間

社会は機械なのか？おそらく社会学理論において核になりうる問いの一つがこれである。そして、この問いに対する様々な返答が理論を作りだしてきた。それらの中にはしばしば印象的な物言いもあり、後の時代の議論にも影響を及ぼしてきた。

ここで取り上げるのは、ウィーン出身の思想家カール・ポランニー(1886-1964)の思考である。ポランニーは多くの場合「経済人類学」と呼ばれる分野の創始者として高く評価されてきた¹⁾。代表作は1944に刊行された『大転換——われわれの時代の政治的経済的諸起源 (The Great Transformation: The Political and Economic Origins of Our Time)』である²⁾。ポランニーはこの本の中で、労働と土地と貨幣は本来商品ではないはずなのが、市場経済の発展によって商品化され、そのことによって社会全体が市場に従属させられると論じた。元来は経済の付属物でしかなかった市場が、経済にとどまらず社会全体を支配するようになる (Polanyi 1975)。そして、ポランニーによると、すべてが市場に合わせられる形で「大転換」した社会は、人間に決して幸せをもたらしていない。

市場に合わせるとは、すべてが商品として再定義される事態である。ここでは人間の労働、それどこから人間自体も商品にされてしまう。唯一の基準は市場価値、つまり市場で売れるのか否かであり、売れない要素は容赦なく捨てられる。人間もまた「労働」という商品を売り渡すだけの存在とされ、それ以外の生は不要物として放置される。こうして、人間は自らが作りだした市場に従属していくことになってしまう。

もちろん、労働が商品化させられ市場の支配下に置かれるという議論は、カール・マルクスの議論をすぐに連想させる。労働の商品化に、疎外論。このことからポランニーをマルクス主義の思想家として理解しようと

する議論もたくさん行われてきた。確かに、ポランニーがある種の社会主義の信奉者であったことは間違いなく、また市場経済の専横（人間を取り巻くすべての商品化）がもたらす害悪を非難し続けた点もマルクスの議論と親和的である。また、伝記的な事実を追う人々は、ポランニーが若い頃オーストリアのマルクス主義運動に参加していた事実を強調する。

ただし、本稿ではマルクスに起源をたどることができる歴史観や理想社会観を問題にするのではない。ここで問うのは、ポランニーの考える近代社会像から、社会学理論にとってのいくつかの着想源を取り出すことである。私見では、ポランニーのような思想家は、「グラント・セオリー（大きな理論）」⁹⁾ という観点からすると、マルクスのような理論に飲み込まれてしまう。そして、単なるマルクスの垂流、派生として評価するならば、たいした貢献はしていないということになる。しかし、その一方で、この人の本の中には独自の意味深い洞察が観察できる。それらは「マルクス主義」のような思想と政治運動の複合体という観点からはなかなか注意が及ばない部分でもある。

たとえば、ポランニーは「機械」という言葉をかなり独特の意味で使う。たとえば1947年の小論「時代遅れの市場志向 (Our Obsolete Market Mentality)」では次のような一文が冒頭にある。

「機械時代の最初の世紀が恐怖とおののきのうちに幕を閉じようとしていた。人間がみずからすすんで、熱狂的なまでに機械の要求に服従した結果、この時代の物質的成功はすばらしいものであった。結局、自由主義的資本主義とは産業革命の挑戦に対する人間の最初の対応であったのである。われわれは、精巧で強力な機械を存分に使用するために、人間の経済を自己調整的な市場システムに変形し、その思想や価値をも、この新しく特異なシステムに適合するように鋳直したのであった。」(Polanyi 2003: 49)

19世紀の中頃に始まった「機械時代」は1947年に幕を閉じつつあるのだろうか。ただし、ポランニーの主張が正しかったのか否かは、ここでは重要ではないだろう。むしろこの論文が書かれた1947年という時点で当人の意識がどうであったのかが大切で、それは二度の世界大戦がもたらした惨禍に対する「恐怖とおののき」であることが容易に想像できる。元来は人間が作りだしたはずの「機械」は、熱狂的に支持され、自発的に服従されたが、結果は今まで知られていなかったまでの惨状であった。

観点を換えれば、ここに「資本主義」の帰結に直面した20世紀前半の多くのヨーロッパ知識人の反応が凝縮されているといえる。古くからのヨーロッパ知識人、近代の大学教育を受けた少数の人々は、自分たちが社会発展の主人公であると信じているのだが、発展がやがて加速し、自分たちの手に負えなくなる事態に直面する。そして、自分たちの先人が作り出した「機械」が暴走し、知識人が古くから大切にしてきた価値を浸食する。

最初はずばらしい機械を手に入れたことで上機嫌、今までにない成果を上げる状況に満足しているのだが、次第に状況が変わっていく。新しく登場した機械は、同時に今までにないほどに不都合な結果をもたらさう。

それはフランスの作曲家ポール・デュカスが1897年に発表した交響詩『魔法使いの弟子』を連想させる。師匠の不在中に教わった魔法を見よう見まねで使う弟子は、大騒動を引き起こしてしまい、自力では收拾を付けることができなくなる。結果、師匠に大目玉を食い反省する。機械を発明し、改良するのは知識人(科学者)なのだが、機械がもたらす結果についてはわからない。要するにお手上げ状態で、自分たちが最初に意図したのとは全く違う結果に「恐怖とおののき」を感じる。

そんな結果がもたらされた原因は、ポランニーの考えでは「機械」に好都合な「自己調整的な市場システム」である。ここで興味をそそるのは、機械の発明や改良による「産業革命」が原因で、経済が「自己調整的な市場 (the self-regulating market)」に変形されたと考えていることである。しかも、思想や価値も変形したのだという。自らを調整する市場は知識人が信奉する思想や価値までも変えてしまい、多くの人々にはその問題が見えなくなっているというわけである。先の文章につづいて、ポランニーは次のように書いている。

「今日、われわれは、このような思想と価値のいくつかについて、その真理性と妥当性を疑いはじめている。もはや、アメリカ合衆国以外については、自由主義的資本主義が今なお存在しているなどということはほとんど不可能に近い。われわれが今新しく直面している問題は、人間生活をどう組織するかということである。競争的資本主義の仕組みが衰えていくにつれ、その背後から産業文明の本性が不気味に顔をのぞかせている。そこにはすべてを無力化する分業、生活の標準化、生物(オーガニズム)に対する機械(メカニズム)の優位、自発性に対する組織の優位がある。そもそも、科学には狂気がつねにつきま

とう。これこそまさに永遠の問題である。」(Polanyi 2003: 49-50)

まさに1947年の実感なのだろう。人間に害を及ぼす自由主義的資本主義はアメリカ合衆国に「封じ込め」られ、ヨーロッパやアジアは社会主義がますます波及していくと考えられた。20世紀は世界各地に「社会主義」が登場しては消えていった時代で、それらに共通するのは「人間生活をどう組織するか」という課題に答えることである。多くの人々が、「自己調節的な市場」ではもはや巨大化した「産業文明」を管理することはできないと考えたのである。

管理するためには、何らかの賢明な管理者が独裁的な権限ですべてを管理しなければならない。賢明な管理者は理性的で最も合理的な選択を常に行う。そして、人々を隷属状態(商品化)に陥れる「産業文明」を規制し、人々が人間らしく生きる余地を確保しなければならない。まさにこれがポランニーをはじめとする当時の多くの知識人たちの考えだったのだろう。

もちろん、この種の考えには今日の視点から見てたくさん問題がある。まず最初に、多くの人々が信じている思想や価値の間違いに、なぜポランニー(のような人々)だけが気づくことができるのか。「真理性」と「妥当性」をなぜいち早く疑うことができるのか。そして、自分(たち)だけが気づいたことや疑いが本当に正しいとどうやって証明できるのか。もしもそれが証明できるためには、多くの人々がもっていない能力をポランニーが所有していることをまず明らかにしなければならない。

ただし、この種の議論の弱点を指摘して全体の意義を否定するのならば、そもそもポランニーを読む必要はないだろう。さらにいえば、あまりに厳密な追及をすると、特定の要因を取り出してそれを基に「文明」や「経済」や「資本主義」について語るという立場そのものが全否定されてしまう。

むしろ重要なのは、時代の証言者が実感していた意識と、それをめぐる語りである。特にポランニーのような、既存の「グランド・セオリー(大きな理論)」にかなり依拠しながらも、時折鋭い独自の洞察を行う人物の場合はなおさらである。大きな理論、たとえば「自由主義」と「社会主義」、マルクス主義と資本主義といった対立関係の議論で分類してしまうと、この種の人物はどうしても埋没してしまうからである。

むしろ、大きな理論に依拠しながら、通常のそれらと異なった考えを打ち出している部分に注目すべきだろう。さらに子細に読んでいくと、ポ

ランニーが時代を越えた思考力をもっていることが見えてくる。

ポランニーがここで指摘するのは、「機械（メカニズム）」と「生物（有機体、オルガニズム）」の対立という問題である。20世紀後半、特に1960-70年代というのは、あらゆるものを「メカニズム（機械論）」で説明しよう、あるいはあらゆるものを「メカニズム」に改良しようという思想の全盛期でもあった。

2. 機械論の社会

20世紀以降の社会理論をいろいろな意味で象徴する言葉に「機械（メカニズム）」がある。何よりもこれが象徴的なのは、通常の場合、ずいぶんと高度な問題を論じる場合によく登場するからである。もちろん、蔑称としての意味はない。「精緻なメカニズム」といえば対象を最高度に尊重している場合がほとんどである。

そして、「機械（メカニズム）」は美称や尊称として使われるからこそ、まさに今日の社会の性質の一面を切り取っているように思われる。人々が、自分や他人が属する組織や集団の「メカニズム」をほめたたえ、その「精緻さ」や「巧妙さ」に驚嘆する時、人々は自ら機械としての集団や組織、そして社会に賞賛を送っている。つまり、機械である社会は多くの人々にとって、少なくとも悪いものではないのである。

ただし、社会学理論において「機械（メカニズム）」の評判は必ずしも芳しくない。ここに学問というよりも思想として社会学の独自性がある。このことはたとえば、「社会は機械なのか？」と、多くの社会学者たちに問うてみればすぐにわかる。多くの社会学者は、社会は機械ではないと答えるだろう。さらに先の問いを、社会を人間という「部品」で組み立てられた「機械」であると考えるとどうなるか？と言い換えるならば、もっと多くの人々が否定しようとするだろう。人間は部品ではない、そもそも人間はモノではないと考えるからである。

しかし、その一方で「機械（メカニズム）」は多くの人々に支持された思考でもある。それは見渡しがたいほどたくさんの部品が完璧に調整され、秩序だって作動する様子であり、個々の人間の力ではとても不可能な作業を可能にする偉大な成果でもある。巨大な機械を作ったのは、間違いなく人間であり、とりわけ人間の理性である。しかも、機械の製作には個々の部品の設計や製作の段階から無数の人々が関係している。そして、

人間が人間の作った機械に愛着を感じ、自然物にはないこだわりを覚えるのは当然であるともいえる。機械は人間の理性と、意志、そして多くの人々の協業の象徴である。

ところが、無数の人々の手によって実現した機械は、人間にとってよそよそしい存在でもありうる。当然のことだが、機械はしばしば人間にとって「機械的」なのである。つまり、人間が考えていることとは無関係に同じことを繰り返す。あるいは、人間の意図とは別に特定の目的を実現する。すなわち、機械とは人間の考えや意志や意図を超えた強力な存在であり、人々はしばしば機械に従うことになる。まさに「機械的」に進んでいくのである。

「機械」は、おそらく人間にとって二面的な意味——両義性——を体現した象徴なのだろう。一つは人間の理性の象徴であり、もう一つは、人間の意志を超えたものの象徴でもある。しかも、それぞれが二面的（両義的）である。人間の理性は人間の利益にもなれば脅威にもなる。また人間の意志を超えたものは人間の意志を超えて利益をもたらす可能性と同時に、人間にとって想定不能の脅威ともなりうる。

ただし、両義性（善悪、好悪、功罪などの二面性）は人間を取り巻く環境、さらにいえば人間が日常的に作りだしている社会において常につきまとう可能性でもある。さらに、視点の位置によって見方が変わる遠近法（パースペクティブ）という考えを取り入れれば、「機械」をめぐる複雑な問題の連なりが見えてくる。

さらに視点を変えていえば、「機械」をめぐる何らかのことを語るということは、同時にそれ以外の側面を捨象することでもある。たとえば、機械を「人間の仕事を奪う敵」と捉えることは、それ以外の側面を捨てることになる。もちろんこれ以外の視点はいくらかでもある。そして、人間は機械について様々に語りながらも、実際にはもっと多様な形で機械を使い利用し、また使われ利用されている。もっといえば、機械についての語りは、人間と機械との関係のごく一部であるにすぎない。

議論を社会学理論の問題に絞ると、社会学は機械との間で面白い関係を作りだしてきた。まさに両義的な態度で、一方では機械を社会進歩の象徴として捉えつつ、他方では失業をもたらす、人間を隷従させるものとしても非難する。ただし、社会学理論の場合、通常の両義性と異なるのは、実は機械についての語りそのものが社会学理論それ自体を作りだしている

いうことである。

言い換えれば、機械について語ることそのものがある種有力な理論なのである。本稿の課題は、「機械」という素材を使いながら、社会学理論がそれ自体として作りだされていく様子を観察することにある。さらに言葉を付け足していえば、社会学理論はしばしば「機械」を目指して構想されてきた。より正確には、精密な機械の設計図を描くこと、あるいは取扱説明書となることを目指してきた。その種の考えによれば、社会は巨大な機械であり、機械である以上は設計図がなければならない。

あるいは、社会そのものを設計してしまいたいといった考えも生まれる。無数の人間が勝手に自分の欲望のままに行動するのではなくて、理性的な人々が最良の学識や最新の科学の成果を用いて設計すれば、はるかに完璧な社会が設計できる。そんな野望も各種登場してきた。また、社会を機械のように一から設計しないとしても、巨大で複雑な社会を合理的に取り扱うための説明書を提供しようという考えも登場してきた。その種の説明書があれば、人々の社会生活が便利になり、無駄が省けるだろうという考えが根底にある。

これらは社会を機械であると考える立場であり、また同時に自らもまた機械の一部であることを否定できない。理由は簡単で、社会は間違いなく人間が作りだしている以上、社会が機械であるならば、それを作りだしている人間も機械の一部でなければならないからである。もしも、そうではないのならば、社会は機械ではないということになってしまう。すると、社会を機械として考える様々な理論が根拠を失ってしまう。

3. 機械論と目的論

社会を「機械」と捉える議論は、共通して社会に対して特定の目的を設定しようとする。考えてみれば当然で、目的に応じて設計され制作されるのが機械だからである。このことは「無目的な機械」を思い浮かべてみればよい。火がつかないライター、走らない自動車というのは、もちろん機械ではあるが当初の目的を達成できないという理由で、修理されて目的を達成する「機能」を回復するか、あるいは破棄される。逆にいえば、目的がありそれを達成実現することができる——機能を果たせる——からこそ機械なのである。つまり、社会に特定の目的を設定するという事は、社会が特定の目的（機能）を果たすべきだという考え方に基づいている。

そして、社会に目的を設定し、社会の各部分が目的のために機能を果たすという考え方が生まれる。まさにこれが機能主義である。全体として目的を果たす機械は、様々な部品（コンポーネント）によって組み立てられており、個々の部品の機能もあらかじめ決まっている。そして、個々の部品にとって望まれるのは、設計通りの機能を正確に果たすことである。部品は部品であって、当初の設計された機能以外の働きをしては困る。

ここまで考えてくると、ポランニーがいう「すべてを無力化する分業、生活の標準化、生物（オルガニズム）に対する機械（メカニズム）の優位、自発性に対する組織の優位」というのが、また別様に見える。それは機械になる社会を構成する人々を、まさに部品として取り扱う状況である。人間は部品であり、モノであり、特定の機能を果たし、機能を果たせなくなれば「使用期限」「耐用年数」が切れたとして取り除かれる。優先されるのは機械（社会）全体の目的であり、個々の部品は全体のために無条件に奉仕しなければならない。

1947年のポランニーにとって皮肉なのは、「産業文明の本質」がもっとも露骨な形で出現したのが、「資本主義」に抗して登場したはずのソビエト社会主義だったことである。ソビエトの全体主義はあらゆる人間を部品として取り扱い、全体の目的のためにすべての人々に無条件の犠牲を強いた。

それは社会主義という思想にとって不可避の帰結でもあった。社会主義は自明のこととして理想状態の「社会」を想定する。それは当然、特定の理想を目的とする社会である。ただし、社会を構成するすべての人々が肝心の「理想」を正しく知っているのかといえば、それは難しい。理想を知るには人並み以上の知性や知識が必要だからである。そして、社会の理想について知的に探求することができる人々は限られている。多くの人々は、そんなことに関わっている余裕がないからである。

その結果、ごく少数の人々が全体の理想を最も知っているという想定をせざるをえない。それは、いうならば社会の知的選良（エリート）である。知的選良は全体のために最良の目的や目的のための計画を考える。彼らは最も合理的で最も優れた考えを生み出すとみなされなければならない。そうでなければ知的選良ではないからである。知的選良（エリート）の人々が考えた計画は完全無比であり、それに逆らうのは非合理であり、間違っているということになる。

こうして全体主義の体制（システム）が生まれる。考えるのは社会という機械を設計した知的選良、あるいは天才的な個人（指導者）であり、多くの人々は部品として機能を果たせばよい。多くの人々は与えられた機能を果たせばよく、すべての機能が万全に果たされれば理想の社会が実現するというわけである。

もちろん同じことは国際的（インターナショナル）な「社会主義」に刺戟されて生まれた「民族社会主義（国民社会主義、ファシズム、ナチズム）」にもあてはまる。社会主義（共産主義）やファシズム（ナチズム）といった全体主義が決まって特定の個人を崇拜するのは偶然ではない。知的選良は、理想的には一人であるのが望ましいからである。もしも仮に複数の知的選良が理想をめぐる対立したのでは、理想社会はどうなってしまうのか。それでは「理想」は実現できないからである。

考える対象を「国際的（インターナショナル）」にするにせよ、限定された「民族（ナツィオン、フォルク）」にするにせよ、個々の人々（部品）が、全体（理想社会）に無条件に奉仕するという点では同じである。

このように考えてくると、社会主義が考えた「社会」というのがいったい何なのか？という問いが浮上してくる。簡単に答えれば、機械論的な社会観の究極の形は全体主義である。そこには特定の設計者がいて、設計者は特定の目的を「社会」に設定する。

4. 有機体による社会

機械論的社会観（社会機械論）に対比される社会有機体論の要は、社会に特定の目的がないということである。有機体としての生体について考えればすぐにわかることだが、生体に特定の目的はない。目的があるとすれば、「生きること」だろうか。

有機体をめぐる議論には一つの混乱がつきまとう。それはたとえば個々の生体を構成する身体の一部が果たしている役割を機械論の考える「機能」と混同してしまうことによる混乱である。例えば生体としての私自身は、今ここで両手の十本の指を使ってコンピュータのキーをたたいてこの文章を書いて（入力して）いる。この動作（行動）において、私の指はパソコンに入力するという「機能」を果たしているということは不可能ではない。しかし、私の指と指がたたいているキーボードとの間には決定的な違いがある。いうまでもなく、指にとってパソコンのキーをたたくという

「機能」は他にもありうる可能性のごく一部であり、次の瞬間にはペンを手にとって本の欄外に書き込みをしているかもしれない。人によってはピアノを弾くこともあるだろうし、料理を作ることも、野球のバットを握ることもありえる。つまりパソコンのキーをたたくことは指の「機能」ではないのである。

これに対して、機械の場合は特定の機能が最初から設定されており、それ以外に可能な役割は副次的でしかない。たとえば、パソコンのキーボードでかゆい背中をかくことはできるが、それはキーボードの「機能」ではない。つまり、キーボードにはコンピュータに入力するという機能があらかじめ決定しているのに対し、人間の指にはそれが無いのである。

ただし、話をもっと複雑な対象に移ると問題は簡単に識別できなくなる。例えば、社会を「機械」としてとらえる場合には、そこで活動している人間を、特定の機能を果たす部品として考えることがよくある。つまり、大きな組織にあって、毎日延々とパソコンの入力を行っている人々は、組織にとってパソコンと等価であるということになりうる。もちろん、工場で同じ工程を毎日繰り返している作業員も、工場という機械で特定の機能を果たしているといえる。

このように考えてくると、本来有機体（生体）であるはずの人間もまた、人間自身の考えによって機械の一部分——部品——として機能するということがわかってくる。しかし、言うまでもないことだが、人間は機械ではない。もちろん、人間が生きることに特定の目的があるわけではない。しかし、同時に組織というのはあくまでも人間が作りだしている。

このように考えてくると、ポランニーの議論が、おそらく当人の意図よりもはるかに長い射程をもっていることが見えてくる。当人は資本主義の市場経済が人間を「機械」の部品に変えてしまう事態を憂い、社会主義がそれを救済すると考えたのだが、実際には「社会主義」というのも同じような社会観の別版であった。むしろ、社会主義は市場経済の柔軟性（不確実性、ゆらぎ）を欠いている分だけ、はるかに容赦ない形で人間を機械化、部品化させようとした。

ポランニーにとっては、これも皮肉なことに、市場はむしろ多くの人々が機械ではなくて人間（有機体、生体）である可能性を確保する役割を果たしてきた。ポランニーは市場の根幹を機械化に見たが、市場の性質はそれだけではない。むしろ、常に変化し、以前のやり方が後に通用しなくな

ることもまた市場の特質である。市場は、当事者たちにとっても常に予想外の結果を伴っているからこそ意義がある。そもそも、創設者や設計者の意図のままに正確無比に延々と動いていく「市場」などというのは、市場ではなくてただの機械（分配機構）である。このように考えてくると、ポランニーの次の文章は通常とはかなり異なった形で解することができるだろう。

「しかし、単に全盛期の理想を復活させるだけでは、解決方法は示されない。われわれは未来に対し毅然と立ち向かわなければならない。その結果、機械を社会のなかに吸収するために、社会のなかにおける産業の位置を変える企てが必要になるかもしれないが、それでも、そうしなければならないのである。そもそも、機械とは社会にとって外生的な事実であったのである。産業社会の民主主義を探し求めることは、資本主義の諸問題の解決を求めることにほかならないと多くの人々が考えているが、そうではない。それは産業そのものに対する解答を探し求めることなのであり、それが今日の文明にとっての具体的な問題なのである。そのような新しい制度は内的自由を必要とするが、われわれにはその点での用意がほとんどない。われわれは、社会における経済システムの機能と役割について、あまりにも単純な見解を市場経済から相続し、愚かしくもこの遺物の虜になっているのである。この危機を克服するためには、人間世界に対する、より現実的な視野を取り戻し、その認識に照らして、われわれの共通目的を形成していかなければならないであろう。」(Polanyi 2003: 50)

ここでポランニーは、産業社会の問題を資本主義の問題と取り違えてはならないと主張する。そして、市場の原理をそのまま社会一般に当てはめようとする愚を再考するべきであるとも主張する。

ポランニーにとって「産業社会」というのは、市場の不条理な要求であった。人々は市場のせいで機械にされ、人間性を奪われる。市場は機械的な効率性を追い求めるあまり、市場を構成する人々を非人間的な状況に、機械の部品としてのあり方に追い込むと考えたのだろう。

ポランニーの思考が最良の成果を実現するのは、私見では、まさにこの点である。つまり、いろいろなイデオロギーはあるにせよ、それぞれの言い分はあるにせよ、20世紀の思想は人間を機械の部品として固定しようとしてきた。しかし、それは間違いで、人間は機械の部品でもなければ、特

定の機能を果たす「要素 (コンポーネント)」でもない。

言い換えると、ポランニーの思考にとって重要なのは、現代の人々が無条件に信じている機械化への信仰を問い直すことなのである。念のために強調すれば、この人物が機械化への対抗策として考えていた社会主義というのは、この場合重要ではない。むしろ、20世紀のイデオロギー対立を想起させる社会主義や資本主義といった言葉は、ポランニー自身の時代制約、世代的な限界を際立たせるだけであって、この視点から読んでいっても、たいして得るものは多くないだろう。

さらに慎重に読んでいくなれば、ポランニーがすでに1947年の時点で、「冷戦」の過ちを見通していたと解することもできる。重要なのは機械化や産業化がもたらす社会への影響にどう対処するのかということであって、機械や産業を誰が所有しているのか——私有か国有か——という問題ではない。

21世紀の視点から見ると、「東西対立」「冷戦」の時代の議論は多くの間違いをかかえたまま続けられていた。たとえば「資本主義」という言葉は大きな誤解の元で、対抗概念とされた「社会主義」の下では「資本」は消えてなくなるかのような錯覚をもたらしてきた。しかし、どんな制度の下にあらうとも、発達した工業生産に基盤を置く産業社会には大きな「資本」が不可欠である。それが「資本主義」の下では私有され、「社会主義」では国家などの公的機関に所有されるという点が違うだけである。

もちろん資本には、「機械」も含まれる。だから社会主義の制度が実現したところで、資本や機械が消滅するわけではないし、資本を誰が所有し管理するのかという問題や、ポランニーが指摘する「機械化」の問題が解決するわけでもない。

ところが20世紀の「東西対立」「冷戦」の時代には、政治的対立やイデオロギー対立に目が行ってしまった結果、多くの人々は自分が暮らす社会の問題のすべてを、対立する敵の陣営に押しつけることで解決できると信じていた。たとえば、「資本主義」の制度の下で「社会主義」を信奉する人々は、あらゆる社会問題を「資本主義」のせいにし、長らく実現しない「社会主義」が実現したならばそれらがすべて解決すると考えた。同時に、「社会主義」を標榜するロシアや中国では多くの社会問題は解決済みであるといった奇妙な主張をしていたわけである⁴⁾。

また社会主義を標榜する「ソビエト」のような社会では、すべての社会

問題が「資本主義の残滓」、あるいは「社会主義革命」を妨害しようとする「資本家」や「ブルジョワ」の策略や陰謀として説明された。

結果としていえることは、「東西対立」「冷戦」の下、多くの人々が本来の問題ではなくて単なる政治的対立に熱心に取り組んでいたことである。そして、多くの課題が放置されたまま21世紀を迎えたのである。

5. 放置された問題

本稿では先にポランニーのような著者の特性について少し述べてきた。「大きな理論 (グランド・セオリー)」から俯瞰するような読み方をすると、ポランニーのような人物はひどくみすばらしい「亜流」のようにしかみえないと、強調してきた。つまり、ポランニーをマルクス主義の派生、亜流として読むならば、たいしたことをいっているようにはみえない。しかし、その一方で、子細に議論を追っていくと、実は大切な問題に行き着いていることがある。たとえば、同じ「時代遅れの市場志向」には次の一文がある。

「全般的にみて、共産主義者のいう「国家の消滅」への期待は、自由主義的ユートピアニズムの要素に、制度的自由に関する実際の無関心を結びつけた結果であるように思われる。国家消滅に関しては、産業社会は複合社会であり、いかなる複合社会の存在にも組織的な中央集権が必要であることを否定することは困難である、といわなければならない。しかし、この事実も、共産主義者が具体的な制度的自由の問題について言及を避けているということの言い訳にはならない。なぜなら、個人の自由の問題に迫るべきレベルは、まさにこの現実直視のレベルにおいてなのである。権力と強制が存在しない人間社会はありえないし、暴力が機能しない世界もありえない。自由主義の哲学は、そのような本質的に的にユートピア的な期待の実現を約束するようにみせかけて、われわれの理想を誤った方向に導いたのである。」
(Polanyi 2003: 69-70)

自由主義と共産主義には密かな共犯関係がある。共産主義者のいう「国家の消滅」は自由主義由来のものであり、共産主義者は「国家の消滅」をいうことによって、最も肝心の権力の問題を無視している。

共産主義と自由主義が同根であるといえ、ポランニーの議論に入念に付き合っていなければ、びっくり仰天の暴論であるか、あるいは誤解して

読み飛ばされてしまうだろう。議論の順番をポランニーの議論に沿って再確認すると、19世紀の(古典的な)自由主義は市場経済を手段として貨幣による人間の解放を想定した。がんじがらめの社会関係に縛り付けられた自給自足社会の農民は、土地を金に換えて都市に出ることによって「自由」になる。どこの工場で労働者として働くのも自由だが、失業してスラムに入りこむのも自由である。企業家は古くさいしがらみから自由に利潤を追求することができ、煩わしい国家による規制も撤廃させようとする。成功すれば富と名声が得られ、失敗すれば倒産する。成功するのも自由ならば、失敗するのも自由。市場は、宗教や地域社会の習慣からも自由でなければならない。このように考えていくと、自由主義が伝統や宗教や地域社会や国家からの自由を意図しており、究極のところ一種のアナキズム(無政府主義)に結びつくことは容易に理解できる。

ポランニーが独自のものは、こういった古典的自由主義が含んでいるアナキズムと、「国家の消滅」を主張した共産主義の主張が、実際には同じ発想に基づいていることを指摘する点にある。共産主義の主張の難点は、私有財産(貨幣)に基づく自己調整(=市場)によって「国家の消滅」を願ってきた自由主義の発想だけは受け継いでおきながら、同時に私有財産(や市場)も撤廃しようとする点にある。つまり、個人や集団から私有財産を取り上げておいて、同時に個人の利害を調整する機関も廃止するなどということが出来るのか?という重大な難問に答えられないからである。結果はおなじみで、ソビエト体制にみられるような超強権官僚制国家の登場であった。「国家」は消滅どころか、それまで誰も見たことのないほどに強力で抑圧的な姿になってしまったのである。

そして、これこそがポランニーのいう「機械」としての社会、機械になる社会なのである。ポランニー自身がどこまで自覚していたのかは別として、この人物が独自に重要な問題に行き着いていたことは事実である。ポランニーを読むことは、20世紀の知的な遺産をそのまま継承することではなくて、むしろ20世紀が放置した問題を再発見することなのである。

それは「理論」や「思想」と呼ばれる領域が、過去のある時点でボタンの掛け違いをしたまま延長してきてしまった過程を再度たどり直す仕事でもある。地味な仕事で、「何を今さら」という印象を与えかねないが、ずれたボタンのシャツを着続けるのは気持ちのよいものではない。放置しておく、昔の間違いがいつまでも影響を残してしまう。そして、今現在の

世界を生きる人々の思考に的確に答えることができなくなってしまう。

今日、世界的に人文・社会科学の「理論」や「思想」が低調な状況に陥っている。原因はいろいろあるにせよ、その一つとして時代遅れの対立構造にいつまでもこだわっている状況があるのではないだろうか。例えば、ポランニーを介して本稿でみてきた20世紀の「東西対立」や「冷戦」も、それが時代遅れになってかなりの時間を経ているにもかかわらずいまだに負の遺産を残している。

ポランニー自身が1947年に次のように書いていたのは21世紀の人々に反省を強いることになるのではないだろうか。

「われわれの世代の眼に資本主義の問題と映るのは、実は、産業文明というはるかに巨大な問題なのである。経済的自由主義者にはこの事実がみえない。経済システムとしての資本主義を弁護する時、彼は機械時代の挑戦を無視しているのである。しかし、もっとも勇敢な人々でさえも震撼させている今日の危険は、経済を超えている。トラスト解体やテラー・システム化などの牧歌的な心配事は、ヒロシマに取ってかわられた。科学的野蛮がわれわれにつきまとっている。ドイツ人は太陽光線を死の光線に変える発明を計画していた。われわれは太陽の光を覆い隠すほどの死の光線を実際に爆発させた。しかも、ドイツ人が悪魔的哲学を有していたというのなら、われわれは人間的哲学を有していたのである。ここにわれわれの危難の象徴をみつけなければならぬ。」(Polanyi 2003: 73)

この時点でポランニーは、すでにマルクス主義の次元を越えていたといえるだろう。人間の社会生活全般を機械化しようとする「産業文明」は「東西対立」や「冷戦」を戦う両者に等しく作用していた。問題は自分たちの外部にある悪者(資本家、国家、権力)ではなくて、むしろ自分たちが信じている産業文明にある。

それは「大きな理論(グランド・セオリー)」に出発しながらも、新たな問題を発見していく思想家、理論家の思考の軌跡である。最大の問題は外部にあるのではなく、実は自分(たち)自身が長年にわたって自明である、あたりまえであると信じてきた前提にあった。機械になる社会の問題を放置したことによって、理論や思想はいままで20世紀に縛り付けられていたのである。今日の人々が巨大な組織を無条件に志向し、巨大組織が機械のように「機能」する状況を理想とするかぎり、機械論的な社会観が

もたらず影響から逃れることはできないのである。

ポランニーという思想家の興味深さは、次のような一文に集約的に現れている。いかにもマルクス主義を思わせる物言い（レトリック、修辞法）を使っているながら、言っていることは、実は、通常マルクス主義とは正反対なのである。

「資本主義のもとでは、すべての個人は所得を稼がねばならない。労働者ならば、自分の労働を現行価格で売らなければならないし、有産者ならば、できるだけ多くの利潤を生み出さなければならない。なぜなら、仲間内での彼の地位は彼の所得水準に依存するからである。飢えと利得が——たとえ間接的にでも——土地を耕し、種を播き、糸を紡ぎ、機を織り、石炭を採掘し、飛行機を操縦する理由になる。したがって、このような社会の成員は、自分たちのことをこの二つの動機によって支配されているものとする。実際には、人間は、理論的に考えられているほど、決して利己的ではなかった。市場メカニズムのために人間の物的財への依存性が前面に出てはきたが、「経済的」動機だけが彼にとって唯一の労働誘因になることはけっしてなかった。経済学者も功利主義的の道徳かも口をそろえて、仕事に関しては「物質的」動機以外の動機を無視することを勧めたが、無駄であった。詳しく検討してみれば、人間は依然として驚くほど「混合的な」動機にもとづいて行動しており、自分や他人への義務を果たすという動機も排除してはいけないうこと——そして、おそらく労働そのものを密かに楽しんでること——が判明したのであろう。」(Polanyi 2003: 63)

ここでは表向きは対立していると思われる「資本主義」と「マルクス主義」が、実際には同じ価値観を共有している問題が見通されている。つまり、「人間は金のためだけに働くのであり、金で計られる合理性こそがもっとも合理的なのだ」という価値観である。そして、貨幣を数値化することで社会という機械はますます合理的に機能すると考えられる。またできるだけ短時間の労働で、できるだけ多くの貨幣（賃金）を受け取ることだけが労働者の利益であるとする。ポランニーの立場で考えるならば、ことあるごとに「市場」の支配や専横を非難するマルクス主義者が、なぜ市場の根幹にある金銭決定論（経済決定論）を手放さないのかは不思議である。

結果として、「労働を楽しむ人間」というのはそこの観察できるに

もかわらず、社会科学の思想や理論の世界では厚く封印され、無視されてきたのである。人間は機械の部品なのだから、部品が楽しんではいけないのだろうか。人間が作りだす社会をすべて機械のように見なす社会観は、結果として最も人間を貶めているのではないか。これがポランニーの問いなのである。利己的でもなければ、経済至上でもない人間観や社会観を強調するポランニーは、いわゆる「唯物論」ではない。

あらためて考えてみると、マルクス主義が勝手に唯物論——「物質的」動機の優先（すべては金、拝金主義）——を主張しておきながら、人間の労働が「商品」として金で売り買いされる状況を非難するというのもやはり不思議である。それは、果てしなく自己矛盾を拡大再生産している状況といえる。ただ、20世紀の世界はそんな矛盾が見えなくなるほどに騒乱が多かったのかもしれない。ポランニー自身の意図がどこにあるにせよ、この人物はすでに21世紀の課題を先取りしていたのである。

ここから社会学が学ぶべきなのは、20世紀においていかに多くの「社会問題」が自己矛盾の結果生じてきたのかということであり、しかも21世紀になってもつづいているのかということなのである。ある種の社会学や社会理論は対象としての社会に「矛盾」を見つけ出すことを好んできたが、その一方で理論と理論家自身もしばしば矛盾を犯してきたことについては、ひどく無自覚だったわけである。もちろん、理論自身の矛盾を明らかにすることもまた、理論の大切な仕事である。

このことは、「社会」をめぐる語り方（修辞法）⁵⁾が特定の型を踏襲していくことで、特定の型の思考を後々の人々にまで強制していく事態を明らかにする仕事でもある。人はしばしば特定の型の語り方を継承していく中で、それらが論理的にはらんでいる矛盾に気づかなくなってしまうことがよくある。ポランニーのような著者が貴重なのは、型にはまった語りを踏襲しながらも、既存の思考を突き抜けていくからである。それによって型にはまって古くさくなった語りは新たな生命を吹き込まれ、再生していく。まさにこれこそが過去の優れた思索者たちの著作を熟読していくことの意義なのである。時代の通年や常識と格闘した孤独な思索者の半ば秘められた仕事を再発見することなのである。

注

- 1) カール・ポランニーをめぐるこれまでの研究は、経済学や経済史、経済人

類学の領域に集中してきた。経済学の中でもマルクス経済学の系統の論者たちが、主にマルクス主義の議論の展開としてポランニーをとらえようとしてきた(佐藤 2006, 2012; 若森 2012)。またマルクス主義の立場に立つ経済史学研究からの研究も続けられてきた(野口 2011)。さらに、人類学の立場からマルセル・モースやジョルジュ・バタイユの議論との内的な関連性を探究する中で「経済人類学」を新たに構想する際にもポランニーはしばしば読み込まれてきた(栗本 2013)。これらの議論をごくおおざっぱにまとめると、近代化に伴う市場経済化、いわゆる「グローバル化」の基調としての世界市場化への批判をポランニーに読み取るという立場である。もちろん、昨今の「新自由主義」への批判とも通じ合う議論である。本稿では、これらの先行研究とは異なり、社会学の視点からポランニーが「社会」について以下に考えているのかという問題について論じていくことにする。

- 2) この本が1944年にイギリスで刊行された時の表題が「われわれの時代の諸起源(The Origins of Our Time)」で、同年にアメリカで刊行された表題が「大転換(The Great Transformation)」であった(Polanyi 1975: 415)「訳者あとがき」。
- 3) ここではアメリカの社会学者チャールズ・ライト・ミルズの有名な表現とは意図的に異なった意味で「グランド・セオリー」という言葉を用いている。ミルズはパーソンズの例を挙げながら、当時のアメリカの社会学理論が過度に抽象化した結果、現実社会の考察に役に立たなくなっている反面で、既存の社会秩序を無批判に肯定する含意をもっていることを批判した(Mills 2017)。本稿では、むしろフランスの哲学者ジャン・フランソワ・リオタールの「大きな物語(La fin des grands récits)」という言葉に近い意味で用いているのだが、「物語(語り=仏récit、英narrative)」というリオタール等の用語法からは慎重に距離を取りたいと考えているので「グランド・セオリー」という言葉を使っている。私見では、リオタールの論じる問題は、「物語」というよりも、むしろ「修辞法(レトリック)」の問題だとも考えていることをここで付言しておきたい。注5) 参照。
- 4) この問題をもっとも集約的に示しているのが、マルクス主義者が一時期盛んに用いた「国家独占資本主義」という言葉だろう。レーニンに由来する用語で、資本主義の社会で資本の独占化が進行する結果、巨大独占資本が生じ、これに国家権力が積極的に関与する状態と定義されてきた。国家権力は資本主義を維持するために巨大独占資本と一体化するのだというわけであ

る。しかし、この定義にさらに的確に当てはまるのは、ソビエトや中華人民共和国のような「社会主義」による国家独占であった。これらの「国家独占資本主義」は独裁的な国家権力を維持するために国家権力が行使しうるあらゆる方策を用いて国家が所有する「資本」の優位を維持しようとする。そのためには国家所有以外の資本を犠牲にすることもいとわれない。その結果、「国家独占資本主義」は既存の価値以外の価値を生み出すことができないために、時代の変化に対応することができず、長期的には衰弱していくのである。

5) 筆者は年来、「社会修辞学」という課題について理論的考察を続けてきた(犬飼 2013, 犬飼 2015, 犬飼 2016a, 犬飼 2016b)。人は言語、言語表現によって思考していると考えながら、実際には言語、言語表現によって考えさせられている。その場合、語りの様式(修辞法、レトリック)は、決定的な役割を果たす。現に、「イデオロギー」と呼ばれてきたものは特定の語りを独自に発展させてきており、特定の語り(修辞法、レトリック)を見ると多くの人々は特定のイデオロギー(思想、立場、党派)を感知する。そして、しばしば観察できることは、特定の語り(修辞法、レトリック)が一人歩きをはじめ、多くの人々の思考を支配している事態である。そこでは、人々は自分で考えているつもりでいながら、実際には特定の型の語りに依存して語りの続きを書いている。ただし、ごく少数の人々は既存の修辞法に依拠しながらも独自の思考を展開する。まさにこれこそが社会修辞学の限界であり、ポランニーのような人物が独自性を実現している根拠でもある。

文 献

- 犬飼裕一, 2013, 「ハマータウンの語り方——ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども』をめぐる社会修辞学の試み」『北海学園大学 学園論集』第156号: 1-17.
- , 2015, 「構築される科学, 示唆する科学——科学が語りうること, 示唆すること: 社会修辞学への道程」『現代社会学理論研究』第9号: 14-27.
- , 2016a, 「美を創る修辞法——白洲正子, 社会修辞学試論」『北海学園大学 学園論集』第170号: 1-19.
- , 2016b, 「宮本常一の社会: 『忘れられた日本人』を読む: ——相互関係のなかのひとと人, 社会修辞学試論」, 『季刊北海学園経済論集』64(3): 9-27.
- 栗本慎一郎, 2013, 『経済人類学』講談社学術文庫.

- Mills, C. W., (=伊奈正人・中村好孝訳), 2017, 『社会学的想像力』ちくま学芸文庫.
- 野口建彦, 2011, 『カール・ポラニー——市場自由主義の根源的批判者』文眞堂.
- Polanyi, K., (=吉沢英成他訳), 1975, 『大転換——市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社.
- (=玉野井芳郎・平野健一郎編訳), 2003, 『経済の文明史』ちくま学芸文庫.
- (=若森みどり・植村邦彦・若森章孝編訳), 2012, 『市場社会と人間の自由——社会哲学論選』大月書店.
- 佐藤 光, 2006, 『カール・ポランニーの社会哲学——『大転換』以後』ミネルヴァ書房.
- , 2012, 『カール・ポランニーと金融危機以後の世界』晃洋書房.
- 若森みどり, 2011, 『カール・ポランニー——市場社会・民主主義・人間の自由』NTT出版.